木の言い分⑦

今回からは農薬販売も営む樹木医が当コラムを担当します。
そこで、庭木の簡単な"健康管理、なかんずく農薬を使う場合の手入れ"を連載します。
この季節（当コラムは５月上旬に記述）は新緑が美しい時期で、木々が一斉に萌芽し展葉していきます。しかしよく見ると「枝先枯れ」や「かび症状」も見受けられます。
また、かえでやもみじには毛虫が糸を吐いてぶら下がり、さくらの葉には丸い食害跡も見受けられます。月桂樹にはコナカイガラムシ類も密生していました。もう少ししますと、新芽付近がアブラムシ類で真っ黒、という状況になるでしょう。
農薬販売業をしていますと、症状がひどくなってから、施主さんやその出入りの造園業者の方から相談が持ちかけられます。「農薬で何とかならないか？」ということです。
しかし、症状がひどくなってからでは簡単には良くなりません。人間の病気で喩えるなら、ちょうど"のどが痛い・鼻が出る"レベルを越え、"気管支炎・肺炎"のこともあります。こうなると厄介です。何回も防除する羽目になります。逆に慌てなくても良い場合もあります。では、防除の緊急度別に簡単な事例をご紹介しましょう。

＜慌てなくても良い場合＞
①ケムシ・アブラムシの群生、カミキリムシの穿孔
→　殺虫剤ですぐ対応できます。なお、ドクガの様な害虫は、毛やりん粉の毒アレルギーが大変なので、「そもそもドクガを発生させない」ことを防除の重点を置くべきでしょう。カミキリムシ幼虫も適期に処理すれば防げます。

＜慌てなくても良いが、厄介である場合＞
②葉が真っ白（灰・褐色の場合もある）うどんこ病や黒点症状の炭そ病
→　うどんこ病や炭そ病では木は枯れませんが、年々ひどくなっていきます。これは発病部位（落枝・落葉も含む）が伝染源になるからです。ここで、これらはカビの病害ですが、人間の目（マクロ）に菌糸（うどんこ症状等）が見える状態は、ミクロ的にはそのカビが多発している状態です。足の水虫が頭皮や恥ずかしい部位に飛び火したようなものです。
この場合、半年位かけて根気良く治療・養生することになります。
③「すす病をもたらすカイガラムシ」や「葉を吸汁するハダニ」
→　②に同じで根気良く殺虫剤を使いますが、漫然と使ってもダメで、防除のタイミングがあります。

＜緊急度が高い場合＞
④「紋羽病（少し掘ると根元周辺に菌糸が見える）」「サクラにキノコが生えている」「マツが急速に枯上がる」「カナメの枝葉が落葉する」
→　これらは枯死の可能性が高いものです。また、放置すると周辺に伝染しやがては庭の同一樹全体がやられてしまう可能性があります。速めにご相談下さい。

樹木医　長谷川正文
（(株)向陽アグロガーデニングホールディングス）